

# 教育実習における「授業づくり」についての研究

## －教育実習生の指導で大切になるものを考える－

長崎大学教育学部附属養護学校  
教諭 高谷 有美  
(教育実地研究主任)

### はじめに

本校には、年間を通じて、多くの教育学部の学生が来校する。それは、介護等体験実習を行うため、教師の教育実践を観察するため、あるいは、子どもたちとかかわるためなど、目的はさまざまである。そして、教育実習は、それらさまざまな目的を包含しているものであり、教育学部の学生にとっては、卒業後の進路を見定める大きな機会となっている。これまで、企業就労を考えていた学生が、教育実習を経験したことによって「教師になりたい」という気持ちを抱くようになり、卒業後、教職へと方向転換を図ったという事例も数多くあった。それほど、影響力のある教育実習である。教育実習の指導に携わる者として、もっと多くの学生に「子どもたちとかかわる仕事に就きたい」との思いを抱いてほしいと願っている。

### 1. 研究の動機

教師は、日々、子どもと向き合いながら、学級経営、生活面の指導、授業（教科等）の指導など、多岐にわたる指導に当たっている。どの指導も地道な努力が必要であり、その努力次第で子どもたちが変わるものである。そして、学生が、それを垣間見ることができなのが教育実習であり、教職に就く学生にとって、この教育実習での経験はとても重要な意味をもっている。特に、授業づくりに関しては、授業を行うときに必要な基本的なことである教材・教具等の研究や指導の立案等について、「自ら考え、試行錯誤しながら経験し、自分なりの実感をもつ」ことが重要になってくると考える。

不安と期待を胸に抱き、やってくる教育実習生（以下「実習生」と記す）。そのような実習生にとって、子どもと向き合い、授業を行うことは、大変な緊張を伴うものである。それは、教育実習初日の自己紹介の言葉から窺える。また、本校は、知的障害のある子どもたちの学校であり、授業で扱う内容は、障害のない子どもたちにとって「ごく当たり前」であり「自然に身につくこと」である。そうした「当たり前」で「自然な」ことを、授業のなかで子どもたちに取り組みせようとするとき、「どのようなことを活動として取り上げると良いのか」「どのような配慮をすると良いのか」「子どもたちはどのような反応をするのか」と悩む。そして、実際の授業場面で子どもたちの予想とは違う反応を目の当たりにし、「どうして分かってくれないのか」と疑問にぶつかる。その悩みや疑問を解決しつつ授業を考え、つくっていくことは、とても大変なことであるが、成し遂げたときの充実感は大きい。

そこで、「授業づくり」に焦点を当て、「どのようなことを大切にして、実習生の指導を行っていかなくてはならないのか」を考えてみることにした。

## II. 研究の方法

以下の手順で、「授業づくり」での指導のあり方について、考察する。

1. 教育実習で扱っている「授業づくり」にかかわる本校の実習内容を整理する。
2. 「授業づくり」を指導する上で、私が大切にしていることをまとめる。
3. これまでの「授業づくり」にかかわる実習生の指導実践を振り返る。
4. 以上のことから「授業づくりを指導する上で大切になるもの」を考察する。

## III. 教育実習の概要（学習指導について）

### 1. 教育実習の意義

学習指導にかかわる意義を、本校では次のようにとらえている。

- (1) 大学で習得した教育に関する理論と学習指導や生活指導に関する知識・技能を実践的に応用し、さらに教育を科学的に研究する能力を、具体的経験をとおして集中的に発展させる過程である。
- (2) 教職についての直接的実際の体験をとおして、現場で役立つ指導上の知識や技能を習得し、教師としての資質と能力の向上、特に児童生徒への愛情や教師としての使命感の育成に資するものである。

### 2. 教育実習の内容

学習指導（授業）、特に「授業づくり」にかかわる内容は以下のとおりである。これらの内容を、2回の実習授業で、経験していくことになる。

表1 授業づくりにかかわる内容

教材研究	実態の把握	○児童・生徒の能力、発達 の程度 ○児童・生徒の興味・関心 の傾向		個別の指導課題との関連		
	教材の把握	○教育課題の分析 ○教材・教具の選択、準備、作成 ○内容の選択、配分				
授業の計画	指導案の立案	指導案作成	○単元・題材の設定 ○設定の理由 ○目標の設定（本時にかかわる個別の指導課題からの目標も含む） ○指導計画			
			展開計画	場の設定	教室 座席 教材・教具の配置	
				活動の設定	活動の選択	導入（動機づけ） 展開（中心的活動・個の活動） 終末（まとめの活動）
					活動の手立て	主体的な活動への手立て 教材の使い方
			働きかけ	教師の活動 （声かけ、発問、提示、板書、示範、賞賛） 個別配慮		
評価の項目・方法						
授業の実際	評価	評価	○目的達成の様子 ○取り組みの様子			
		反省	○予想と実際 ○指導技術の反省 ○実態把握の程度			

そして、表1のそれぞれについて、表2に示す対象や視点をもって指導している。

表2 指導の対象と視点

領域	項目	対象	視点
研究	教材等の研究	教材研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 実態の把握</li> <li>○ 創意・工夫</li> <li>○ 熱意のある取り組み</li> </ul>
		指導の立案	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 題材設定の理由、目標の設定</li> <li>○ 指導計画、活動の設定</li> <li>○ 指導上の留意点、評価項目、備考</li> </ul>
		授業の評価と反省	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 目標達成の評価</li> <li>○ 授業の反省</li> <li>○ 客観性</li> <li>○ 原因追及する姿勢</li> <li>○ 自己課題の認識</li> </ul>

#### Ⅳ. 実習指導の実際 ～授業づくりにおける指導で大切にしていること～

##### 1. 「実態把握」についての指導

授業を行う前には、子どもたちの実態を把握することは大変重要なことである。どの程度、実態把握ができたかが、授業づくりに大きな影響を与えることになる。

###### (1) 観察する

「観察する」時、実習生のほとんどが、子どもたちのできない部分や課題となることに目がいってしまう。しかし、授業をつくるためには、それだけではいけない。何ができるのか、得意なのかといった、プラス面の観察を忘れてはいけない。そしてまた、実際の教師の動きなどを観察することも大切なことである。そこで、この両面において、観察する視点(表3)をもちながら、観察に取り組むことが大切である。

表3 観察の視点(例示)

児童・生徒について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ どんなことを好んでやっているか、あるいは、嫌がっているか(興味・関心)</li> <li>・ 教師の働きかけに対し、どのような行動をしたのか(反応の様子)</li> <li>・ どうしてそのような行動をしたのか(状況の把握)</li> <li>・ その行動から推察されることは何か(背景、気持ち) など</li> </ul>
教師について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題をどのようなタイミングで提示したか(課題の提示)</li> <li>・ 子どもの動きに応じてどのような働きかけをしたか(行動の読み取りと対応)</li> <li>・ 集団のなかで個をどのように生かしているか(集団と個)</li> <li>・ どのようなテンポで授業を進めているか(授業構成、進め方) など</li> </ul>

###### (2) 積極的に子どもにかかわる

観察とともに、日常生活場面で、子どもたちにかかわることは大切なことである。一緒に活動するなかで、子どもの反応を感じ、その反応に応じて働きかける。そのようなやりとりを繰り返しながら、かかわりを深めることは、子どもを理解する上で、とても重要なことである。特に、授業にかかわることについて実態を把握する時は、授業で取り上げる具体的な活動に取り組みせたり、授業で使用する教材・教具等への反応を見たりなど、実際に自分で確かめながら、さまざまな角度から子どもをとらえることが大切である。

##### 2. 「指導の立案」についての指導

本時の授業で「子どもたちに何を願うのか」を焦点化させることがまず大切である。そのためには、その単元や題材のもつねらいや系統性、位置づけ等を考えること、そして、その単元や題材で子どもたちがこれまで学んできたこと、などをしっかりと考えることが必要である。そして、次に、焦点化した目標を達成するための学習活動、指導上の留意点、

目標達成を支える評価の観点等を明らかにしていく。本校では、表4に示していることを、指導案に具体的に表現させている。

表4 立案する具体的内容

①本時の目標	本時の指導をとおして、経験もしくは獲得させようとする知識、技能、態度などを、具体的な内容に則して示す。
②過程	○「学習活動」について ・どのような活動をするのかが分かるように具体的に表記する。 ・主な活動の順序に従って番号をうち、具体的な活動は「○」で表記する。 ○「指導上の意図・留意点」について ・学習活動をさせるために、留意すべき事項を書く。また、特別に配慮の必要な子どもへの手だても明らかにしておく。
③評価	本時の目標に照らして、評価の方法と評価項目を書く。 ・目標を分析して評価項目を明らかにする。
④備考	実態、場の設定などについて書く。

指導案を作成するのは、実習生にとって、はじめての経験である。何をどう書くと良いのか分からないのは当たり前のことであり、分かりやすい手順に沿って指導することが大切になる。そこでまず、目標達成のための学習活動とその活動に対する指導上の留意点を考えることから取り組ませる。この時、表5に示すことについて、「何をどのようにするのか」を一つずつ具体的に考えさせ、実際の指導案へとつなげていくようにしている。そして、目標、及び、それを達成させるための学習活動、評価のつながりを見直すということに取り組ませている。ここで大切なことは、いかに自分自身で思考し、考えを深めるかである。その思考の程度が、実際の授業を左右することになる。

表5 指導上の留意点について

学習活動	指導上の留意点			準備物
	全員に願うこと	教材等について	個に応じた支援	
	○ 活動の仕方 など	○ 教材の使い方 ○ 工夫したところ など	○ 取り組めない子どもに対する対応の仕方 ○ どんどん取り組んでしまう子どもに対する対応の仕方 など	

### 3. 「教材・教具等の研究」についての指導

教材・教具は、子どもたちの学習活動にとって、重要な意味をもつ。設定した目標を達成する、授業の構成をスムーズにする、子どもたちの思考を助けるなど、その意味は、さまざまなものであり、一つ一つがとても重要である。したがって、教材・教具等についての研究をどの程度深めたかが、授業を左右すると言っても良い。そこで、指導の立案と並行しながら、以下のことについて、研究を深めさせる。

- |   |    |
|---|----|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本時の目標を達成するためには、どんな教材・教具等が必要か</li> <li>○ 使用する教材・教具の特性は何か</li> <li>○ どのような生かし方をするのか</li> <li>○ その教材・教具を使う時のメリットとデメリットは何か</li> <li>○ その教材・教具をどの子どもたちにどのように使用するのか</li> <li>○ どのようなタイミングで教材・教具を提示するか</li> </ul> | など |
|---|----|

## V. 考察と今後の課題

### 1. 考察

#### (1) 実習生の様子 ～考察に先立って～

授業づくり、特に、授業を行う上で大切になると考えた指導の立案、教材・教具等の研究についての感想を、ある実習生の日録から抜粋する。

今日2回目の授業をした。この授業は、何度も繰り返し、指導案を4・5回書き直した。生徒たちに自分で球根を植え、充実感や達成感を抱いてほしいという願いを強くもっていた。授業を実際に行なってみると、授業に対する思いや生徒への願いは大変大きなものがあるのだが、思うように表すことのできないというもどかしさを感じた。構想を実践に移すことの難しさを強く感じ、構想を生かすための実践方法を身につけることが、これからの課題であると思った。今考えると、「授業でこうすべきだった」などの後悔ばかりが浮かんでくるが、この後悔する気持ちをもっているということが、今は本当にうれしく感じる。自分ができるだけのことをやった上での失敗であるから、後悔を感じるのだと思うし、この後悔が今後の生活に活力を与えてくれるのではないかと感じる。教壇に立つことに恐怖感を強く抱いていた私が、この授業を考えたことで、「もう一度、授業をしてみたい」という気持ちをもっており、悩んでいた教師としての資質のことについても、もう一度頑張っって克服していきたいと思えるようになった。教師はいいものだ、と心から思う。

指導にかかわるさまざまな内容について、自分自身の課題として考え、試行錯誤しながら考え、研究を深めたことで、授業に対する思いや子どもたちに対する願いをしっかりともち、授業に臨むことができたことを読み取ることができた。また、教師になることを決意していることも読み取ることができた。

このように、授業に対し、自分自身で一生懸命考え、行動し、解決しようと研究することができた実習生は、授業終了後、活動に取り組んでいた子どもたちの姿を喜び、満足そうな表情を見せつつも、自分の反省すべき点をしっかりととらえることができていた。そして、授業反省会で、子どもたちの取り組みについての考えを求められた時、動じることなく、自信をもって答える姿を見ることができた。

#### (2) 考察

自分が考え立案した授業で、子どもたちが予想したとおりの反応を見せたとき、嬉しさを感じ、頑張ってみようという気持ちが高まることは、当然であろう。その反面、授業が思ったとおりに進まなかった時に、何とも言えない挫折感や焦燥感を抱くこともあるだろう。そうした挫折感や焦燥感を味わうことが、次の授業への意欲につながることも考える。

自分が考えられることを一生懸命に考え、教材研究をし、授業に臨んだとき、子どもたちの反応の如何にかかわらず、次への意欲を沸き上がらせることができる。つまり、一生懸命自分で考えるということが、自分の授業に対する姿勢、子どもたちへの働きかけ方、教材等、さまざまなことに対し、自分の有り様を見つめ、自己反省をすることにつながるからである。これが、授業をつくる面白さであり、さらなる意欲や探究心を高めることにつながる。だからこそ、授業づくりにおいて、しっかりと、自分で考え、試行錯誤しながら思考を深め、授業で実感することが大切であり、いかに自分自身で思考を繰り返すかが重要であると考えられる。

繰り返し、指導上の留意点について深めていくことで、何を子どもたちにしてほしいのかを明確にもち、子どもたちに向き合うことができる。また、実態把握を十分にし、思考

を深めていくことで、予想外の行動をした時も動揺することなく、軌道修正をし、授業を展開することができる。そして、たとえ動揺があったとしても、子どもたちと向き合い、何とかしようと向き合うなかで、目標に沿った働きかけを行うことができる。このように、自分で思考を深めることが、実際の授業づくりで何より大切であると考えられる。

## 2. 今後の課題 ～これまでの指導を振り返りながら～

実習生は、緊張感を感じながら、授業づくりに取り組む。その時、実習生自身にどれくらい示唆を与えることができるかが、指導する立場にある私たちにとって重要である。

さて、これまでの私自身の指導において、「実習生に的確な示唆を与えることができたか」と振り返った時、果たしてどうであっただろうか。

まだ、本校に赴任したばかりの時は、私自身が実習生の指導に対して自信がなく、また、「こういう指導をしていこう」という明確な意図がなかったため、自分の授業をそのまま実習生に押しつけていたように感じる。それが、今回まとめた「大切になるもの」を考えながら多くの実習生の指導を続けてきたことで、「実習生の考えや思いを大切にしたい授業にしたい。そのためには、授業づくりにおいて、実習生自身に精一杯考えさせることが必要である。」という思いへとつながっていった。さらに、「何をどのように考えさせるのか」といった思考させるときの具体的な手だても、少しずつ見えてきた。そして、一人一人の実習生に応じて、どの程度の支援が必要かも、見えてくるようになってきた。

しかし、授業を初めてつくる実習生が、「自分なりの考えをまとめて授業を行う」ことは、容易ではない。最終的な実際の授業に至るまでに、何度とない試行錯誤を繰り返すため、思考する時間が多く必要となる。「自分が考えられることを一生懸命に考え、教材研究をし、立案する」ことが大切であり、それが、結果の如何にかかわらず、「子どもたちとかかわる仕事に就きたい」という思いにつながると信じているが、限られた時間のなかで、効率的な指導をいかに行うかということは、今後の課題である。

## おわりに

現職の教師である私たちにも、授業において、「これでよし」と満足できるものは、それほど多くない。実態を把握していると思っても、教材・教具等の研究が十分でなかったり、思わぬところで子どもたちたちがつまづいたりすることはある。だからこそ、実態把握すること、教材・教具等を研究すること、十分に考えて指導を立案することは、大切であり、日々研鑽することが必要なのである。それらを垣間見ることができる教育実習である。実習生に、「教師にとって必要な力」と「教師という仕事の魅力」を、少しでも感じてほしい。そして、実習生が「また授業をしてみたい」と思うことのできる授業づくりへの支援を、これからも精一杯行っていきたい。そのためにも、私自身、実習生の思いを実現できるように、授業づくりについての指導のあり方を深めていきたい。

---

### 《参考文献》

- 今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について（報告）
- 教育実地総論
- 教育実習の手引き

長崎大学教育学部教育実地研究委員会編  
長崎大学教育学部附属養護学校編著